



逸話馬道  
文庫シリーズ

# マリア様がみてる

サイドストーリー

春待姉妹草子

木崎 洋一郎

カバー／イラスト／装丁：きぎきよーいちろう

主要登場人物紹介

支倉 令  
黄薔薇さま

島津由乃  
黄薔薇のつぼみ

前紅薔薇さま  
水野 蓉子

紅薔薇さま  
小笠原 祥子

白薔薇のつぼみ  
二条乃 梨子

白薔薇さま  
藤堂 志摩子

紅薔薇のつぼみ  
福沢 祐巳

# マリア様がみてる

サイドストーリー

## 春待姉妹草子

もくじ

### 紅薔薇追想録

#### ◆ 紅薔薇追想録

◆ 師走の便り ..... 10

◆ タイクツとユウウツ ..... 29

◆ イブの朝に ..... 57

◆ ビミヨーな三角関係 ..... 75

◆ 本日は雪天なり ..... 113

#### ◆ ドキッ！リリアンだらけの大晦日

◆ 少女は……Ⅰ ..... 128

◆ 少女は……Ⅱ ..... 144

◆ 少女は……Ⅲ ..... 160

◆ 誰が為に鐘は鳴る？ ..... 174

◆ あとがき ..... 180

「じきげんやうじ」  
「じきげんやうじ」

さわやかな朝の挨拶が、澄み切った青空にこだまする。

マリア様のお庭に集う少女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。

スカートのフリッツは乱さないように、白いセーラーカラーは翻らせないように、ゆっくりと歩くのがここでのだしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒など存在してはいよつはずまじ。

私立リリアン女学園

明治三十四年創立のこの学園は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。

東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる少女の園。

時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日さえ、十八年通い続けられ温室内育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だ残っている貴重な学園である。

一年が過ぎ行くのは本当に早いもので。

ついこの間、お正月に部屋に掛けてある真新しいカレンダーの表紙をめくったと思ったら、気が付けばそのカレンダーも残り一枚となってしまっていた。

冬を越し、春を迎え、夏が過ぎ、秋が訪れて、また冬がやってくる。

期末試験。クリスマス。お正月。成人式。節分。バレンタイン。雛祭り。

そつして日々を過ごしているうちに、また当たり前のように春がやってくるのだらう。

それは、毎年なら変わらない季節の移り変わりではあったけれども。

今年の冬は、私にとって、とても特別な意味を持っているに違いなかった。

外では、冷気を運んでくる北風が、どんよりした雲の垂れ込める街中を我が物顔で駆け抜けていて、時折りその強風が教室の窓ガラスに当たっては、ヒューヒューと甲高い音を立てる。

そんな寒々とした空を、教室の窓から眺めながら、私は心の中で思わず呟いてしまった。

「春なんて、このまま一生こなければいいのに」って。

## 師走の便り

1

師走<sup>しむす</sup>

改めて説明するまでも無いけれども、昔からの暦でいうところの十一月の別称である。

師が走るから、師走。そういえば「師」って、一体誰のことを指すんだろう。

微かな記憶を辿ってみれば、初等部の頃、クラスの担任の先生が余談ついでに話してくれたことには、確か「師」というのは、学校の先生のことを指すんだって言っていた。

普段は滅多に走ったりなんかしないはずの先生達でも、テストだ面談だって、あまりの忙しさで、あちこちを慌しく駆けずり回っているから、というところであっただけでも。

しかし、つい二、三日前に見た朝のテレビの天気予報では、「師」と言っているのは、お寺のお坊さんのことを指すのだと、分厚い黒縁眼鏡を掛けた天気予報士の人が、確かそういう話をしていたのだ。

考えてみれば、お坊さんのことを別名「法師」と言ったりもしたっけ。

「ふーむ」

志摩子<sup>しまこ</sup>さんのお父さんだって、今頃方々を慌しく駆けずり回っているんだろうか。

学園祭でバツタリ会った時のように、アロハシャツに白いスーツ、その上から袈裟<sup>けさ</sup>を掛けて、黒いガラス姿でバタバタ駆けずり回っている、志摩子さんのお父さん。

いつの間にか、そんな想像図がモワモワと頭に思い浮かんでしまい、思わず一人でフツと吹き出してしまった。

と、そこでふと我に返る。

そんな、どうでもいいことを考えている場合では無かったのだ。

十二月も半ば過ぎ。

気が付けば、今年も残すところ僅かとなってしまった。

年の瀬を向かえ、身の回りの大人達は、まるでそう振る舞うことが恒例行事みたいに、誰もが忙しい忙しいと口を揃えながら、あちこちで慌しく動き回っている。

もうと。

リリアン女学園二年松組 福沢祐巳<sup>ふくざわゆうみ</sup>にとっても、未だ学生の身分とはいえず、その例外では

無かったりするのだけれども。

とは言っても、それは今現在、ひどく差し迫った状況でのお話

「うわーっ、あと二分……」

二階から一階へと降りる階段の、踊り場の壁に掛けられてあった時計にチラリと目をやってみると、一つ小さく唸り声をあげると、そのまま階段をバタバタと駆け下りる。

放課後のホームルームが終わって、暫く時間が経っているというところもあって、廊下を行き交う生徒は殆ど見られない。

今日は、一学期末試験の最終日。

テスト自体は午前中一杯で終了して、部活動のある生徒はそれぞれの活動場所に、そつでない下校組は大半がすでに帰途についているのだ。

だから、人目を気にせず遠慮なく、というわけでは無いけれども、廊下の柱の所々に貼られてある「淑女たるもの廊下走るべからず」と書かれた、少し時代錯誤気味のポスターにちょっぴり罪悪感を覚えつつ、息を切らせながら走る。走る。

進んで生徒の範となるべき紅薔薇のつぼみが、堂々と校則違反をするのは、自分でも感心しないなあとは思ったのだけれども、これもお淑やかな紅薔薇のつぼみ像と祥子さまの般若のような恐ろしいお顔を、頭の中で天秤に掛けた末の選択。

何せ、すっかり忘れていた。

今日の放課後、山百合会のメンバー達が薔薇の館に集まって、今年最後のミーティングを行う予定だつてこと。

いつもであれば、薔薇の館で集まりのある日は、同じクラスに居る黄薔薇のつぼみ 島津

由乃さんと一緒に足を運ぶことが多いのだけれども、今日に限って由乃さんは、病院で定期検診を受ける為に、ホームルームが終わると直ぐに下校してしまつたのだ。

いつものように、由乃さんに声を掛けられなかつたものだから、今日の集まりのことを失念してしまつていた祐巳はとうとう、掃除担当である音楽室の掃除が終わつた後も、昨日の夜見たテレビドラマの感想だつて、同じ掃除担当の子達としゃべり出してしまつたわけだ。

じゃあ、どうやって今日の集まりの件を思い出してたか……

それは、音楽室のペランタでお喋りしながら、何とはなしに中庭のほうに目を向けると、そこで、急ぎ足で薔薇の館に向かう白薔薇のつぼみ 二条乃梨子ちゃんの姿を目にしたというわけなのである。

「いきげんよう、紅薔薇のつぼみ」

「いきげんよう、祐巳さま。お忙しそうですね」

一年生と思いき生徒二人組に、すれ違いざまにこやかに挨拶されたけれども、足を止めるわけにもいかなかったので、首だけ後ろを振り返つてこしらも笑顔で「いきげんよう」って挨拶を返す。

「い、なんとかギリギリ間に合ひそうかな……」

校舎を縦断する長い廊下も、程無く終わりに差し掛かり、祐巳は後ろに向けていた首をぐるぐると前に戻した。と同時に、前方の柱の影から突然現われる人影。

「きゃあっ！」  
「ギャッ！」

身体の前方から軽い衝撃を受けて、祐巳はそのまま後ろに尻餅を付いてしまった。ちなみに、最初のごく普通の悲鳴が、衝突した相手のもので、次に発された怪獣の子供の声だ。

「い、ごめんなさい。急いでいたものだから。あ、怪我は……」

慌てて、出会い頭にぶつかった相手に近寄り、目を合わせると、そこでまた「ギャッ！」と怪獣の子供全開。

「福沢さん……紅薔薇のつぼみは、随分と元気がよろしいようですね」

そのぶつかった相手というのが、生活指導を担当している、生徒達の間でも小五月蠅いと評判のシスターだったものだから、いよいよついてないと言わざるを得ない。

「福沢さん」

「は、はいっ！」

祐巳と同じく尻餅を付いたシスターは、落とした書類を拾い、お尻に付いたホコリを両手でポンポンと二、三度払うと、そのまま祐巳の目の前で、廊下に貼ってあったポスターを右手でビシリと指差した。

「この標語、声に出して読んで御覧なさいっ！」

「し、淑女たるもの、廊下は走るべからず……」

「声が小さい、もう一回」

うわ、ネチネチモード。しかし一方的に否があるのは祐巳の方だから、大人しく言われた通りにするしかない。結局廊下に響き渡るくらいの大声で、二度も復唱させられてしまった。

「あ、私、急いでいますので、もうそろそろお帰りにしていただきますか……」

この流れでお説教に突入だけは、なんとかしてもご勘弁願いたいところ。きこちない愛想笑いを浮かべながら、恐る恐るお伺いを立てると、シスターは何かを思い出したかのように、祐巳の顔を見ながらポンと手を打った。

「ああ、そつだ。貴方、小笠原祥子さんの妹なのよね」

「はあ……どうですか」

ついさっき祐巳のことを「紅薔薇のつぼみ」と呼んでおいて、今更、私が誰の妹だなんて確認することも無いだろうと思っただが、そんな些細なことは全く意に介していないような素振りだ。シスターは祐巳に向かって手招きをした。

「丁度良かった。ちょっと貴方にお願ひしたいことがあってね。少し職員室まで、付き合ってくれないかしら」

「え、えっ……でも私、先を急いで」

「直ぐに済むから、まあ、いいじゃない」

駄目だ、人の話を全く聞いてくれちゃいない。しかしながら、まさかシスター直々のお呼び出しを無視してこの場を逃げ出すわけにも行かず、祐巳は招かれるままにトボトボとシスターの後に付いて、職員室へと向かうことになってしまった。

「それでしたって……」

祐巳が祥子さまの妹であることと、シスターがお願いしたい用事。

その二つがどついても頭の中で結びつかず、祐巳はただ首を傾げるだけであった。

## 2

所変わって、薔薇の館。

祥子さまの「機嫌はというと、案の定、すっかり斜め四十五度に曲がっていた。

と言つても、館のドアを開けた瞬間、祐巳に大カミナリが落ちてきたとか、集まりに遅れた理由をネチネチと尋問されたとか、そういう訳では決して無かったのだが。

」

」

集まりの予定の時間を三十分も過ぎてから、こっそりとバスケット扉を開いて中に入つてき

た祐巳に対し、無言で一瞥をくれてから、そこに誰も居なかったかのよつに振る舞う祥子さまは本当に恐ろしかった。これなら、その場で思いきり叱られた方が、なんぼかマシというもの。

「祐巳ちゃん、遅かったね」

気まずい雰囲気を感じたらしい令さまが、祐巳にその声を掛けてから、みんなが座っているテーブルの方においでおいでする。

ドアを開けたまま、入り口でぼけつと突っ立っている訳にもいかなかったので、祐巳は壁に備え付けられているコート掛けにコートを掛けてから、令さまの隣の空いている(いつもなら由乃さんが座っている)席に、小さくなって腰を下ろした。

「祥子はさ、さっきから祐巳ちゃんのこと、心配してたんだよ」

隣に座っている令さまが、祐巳にこっそり耳打ちする。その時、祥子はまじめに「一瞬目を遣ったけれど、すぐにその話を聞いてしまった。」

「祐巳さま、」

いつの間にか、席を離れてお茶の準備をしていてくれたらしい乃梨子ちゃんが、祐巳の横から煎れたての温かい紅茶を差し出してくれる。

今更気付いたことでもないけれど、乃梨子ちゃんの気配りについては一年生とは思えない。時々、祐巳と比べてどっちが先輩なんだか良く判らなくなる事がある。

「乃梨子ちゃん、ありがと」



そのまま封筒を手渡すと、祥子さまは、表の宛名面を見る。  
 「リリアン女学園高等部気付、水野馨子様……お姉さま宛ての手紙?」  
 祥子さまは首を傾げた。

「ええ、そうらしいんです。この封書が、高等部の郵便受けに配達されていたそうです」  
 シスターから聞いた話をそのまま伝えると、封筒を眺めていた祥子さまは、訝しげな表情をしながら、もう一度首を傾げた。今さまや志摩子さん達も、祥子さまから封筒を回覧されて、代わる代わる手に取っては不思議そうな顔をした。

「これ、差出人が書かれていないんですね」

「あ、本当ですね」

志摩子さんの呟きに、隣に座っていた乃梨子ちゃんも封筒を覗き込む。

「うん、リターンアドレスが無いから、先生達の方でも、取り扱いに困っていたんだって」

シスターの話では、学園に生徒個人宛の手紙が届く事自体、かなり稀な出来事なのだそうだが、しかも、宛て先人は昨年度の卒業生ということとで、ひとまず卒業名簿に記載されていた住所宛てに、郵便物を転送すれば良いのでは無いか、という話になったらしいのだが、何せ差出人が不明ということもあって、果たして無闇矢鱈に転送してしまって良いものかと、先生達の間でも、取り扱いを巡って意見が分かれたらしい。

で。

最終的に、馨子さまの妹である祥子さまが、学園内に在校中ということもあって、取りあえずそちらの伝を使って、直接連絡を取って貰えば良いのではないかと、という結論に達したのだそう。

「それにしたって、どっという心算なんだろうね、この手紙の差出人」

「最低限の常識も無かったのかしら、失礼な話だわね」

ボソリと呟く令さまと、眉を蹙めながら憤慨する祥子さま。

「でも、差出人の字はかなりの達筆ですね。随分と手紙を書き慣れていらっしやる感じ」

「うん、差出人は、多分女の人だね」

志摩子さんの意見に、祐巳も同意する。

白い洋形の封筒には、女性の手書きと思われる流麗な文字で書かれた宛名、それにポインセチアがデザインされた八十円の記念切手が左上の隅にキッチリと糊付けされていて、如何にも几帳面な性格の人って印象を受けるのだ。

それだけに、肝心の差出人の名前と住所がスッポリ抜けてしまっていることが、妙に不自然な印象を際立たせてしまっている。

「もしかして、うっかり書くのを、忘れちゃっただけなんじゃないかな」

祐巳の呟きに、「祐巳じゃあるまいし」という、祥子さまの冷やかなツツミが入った。また心にグツサグサ。

「そりゃあ、私は確かにあつちよこさよいですけどね……」  
 それにしたって、我が可愛い妹を、よくもそこまで「きつらさせる」もの。今日の祥子さまは完全に「機嫌斜めだ。まあ、その原因の一端が祐巳にもあること」は、間違いないだけだ。

そんな、祐巳と祥子さまの姉妹邊才は横に置いておいて、今さまも志摩子さんも静かに首を振る。

「確かに、普段から手紙を出すような人が、自分の名前だけ書き忘れるなんてこと、普通に考えればまず有り得ないわね」

「ええ。こつこつものは、殆ど無意識に書いてしまつたものです」

二人とも、やはり何らかの意図があつたのだらう、といふ見方だった。

「さて、そうなるど、この手紙の差出人を推測するしかないわけだ」

しかしながら、ただの一通の手紙から、蓉子さまの交友関係を洗い出して、差出人を推測するなんて苦当が、一介の女子高生に出来るわけなんて無かつた。

そつこつのは、もう立派な警察や探偵さんの仕事だと思つた。

もちろん、封筒に押されていた消印を頼りに、差出人の当たりをつけようとしたのだけれど、どつちやら押印時にスタンプの押しが甘かつたのが、受付局の文字はかすれてしまつていて、ほとんど判読できない状態になつてしまつていたので、その線も使えない。

「結局、差出人に関する情報は、中身を開けてみないと分からない……」と

「どつちやら、そのようですわね」

みんなで顔を見合わせて、息を吐いた。

「ま、いいや。祐巳ちゃんも来たことだし、取り合えずミーティング始めよう」

これ以上、この面子で顔を突き合わせて考え込んでいても仕様がなし。今さまがこの場をまとめて、ひとまず手紙の件の話は「段落落、祥子さまの怒りも取りあえずは「段落落のやつだ」。

で、そのミーティングはと言つと、生徒会関連で特にこれといった重要な話し合いがあつたというわけでもなく、年末に山百合会のメンバーで集まつて何かしようか、みたいな、極々フライングトな話し合いだった。

結局決まつたこととは言つと、大晦日の晩に、志摩子さんの家に山百合会の幹部全員で集まつて、みんなで除夜の鐘を鳴らそうつてつた。

前々から持ち上がつていた計画だったので、各々の意見がぶつかり合つたといつ訳でも無く、話し合い自体は、最終確認のような形であつたり終わつてしまつた。時計を見ると、正味三十分も経つていな。

「それでは、大晦日の晩に、私の家に直接いらっしゃるつてことので、宜しいですわね」

「今日の件、由乃には私の方から伝えておくから」

各々、確認したいことが一通り済むと、ミーティングはお開き。

紅薔薇姉妹を除く三人は、何でもこれから用事があるとかで、慌しく部屋を出ていった。

今さまは、病院帰りの由乃さんと買い物に出掛ける為に帰宅、志摩子さんと乃梨子ちゃんは今日から試験休みという事で、この暫くは無沙汰していた寺院と教会巡りの打ち合わせをするんだそうだ。

祐巳が遅刻させたせいで後の予定が押してしまったようで、全くもって申し訳無い気分である。  
「私達も帰りましょう」

祥子さまにその声を掛けられて、祐巳もみんなの分のティーカップを簡単に水洗いしてから、壁に掛けてあったコートと靴を手に取った。

二人きりになった薔薇の館の中はシンと静まり返っていて、時折り吹いてくる木枯しがビューヒューとガラス窓に当たっては、寂しげな音を立てていた。

## 3

帰り道。

M駅行きのバスに乗り込むまで、祥子さまは一言も喋りなかった。

自分が気まずいからって、無理矢理話しかけるのも躊躇われたので、祐巳も黙って祥子さまの後ろを付いていく。

最初は、さっきの遅刻のことで、まだ怒っているのかなとも思ったけれど、どうやらそういう訳でも無いようだった。何かを考えては心此処に在らず、そういう表現が一番じっくりとゆづな感じがした。

学園前の停留所へとやってきたM駅行きのバスに乗り込んで、空いている座席に二人並んで座る。下校時間をだいぶ過ぎていると言ついてもあって、車内は乗客全員が着席できる位に空いていた。バスを見たリリアンの生徒らしき者は見当たらな。

相変わらず二人の間には言葉が無かったので、祐巳はただゆっくりと流れていく車窓をぼつと眺めていた。

明日から試験休み。試験休みが終わればすぐに終業式、そのまま冬休みがやってくる。

またしばらくの間、どうやって普段通り顔を合わせることも出来なくなってしまうの。

「存在が味、何者かであるんだな」

無意識に、一つ小さく溜め息をういてしま。

「祐巳」

「ひあー」

突然祥子さまに声を掛けられて、祐巳は思わず悲鳴をあげてしまった。

もしかしてさっきの溜め息、聞かれてしまったのかもしれない。

「……なんて声出してんのよ」

「すみません……」

本当に恥ずかしかったらありやしない。他の何人かの乗客もこちらをチラリと見たけれど、何事も無かったかのように、皆視線を元に戻した。

「あの、何が」

「貴方はどう思っていて、あの手紙のこと」

祥子さまは窓の外を眺めながら、静かにそう言った。

「どう……と言われましても。私には、良く分からないとしか」

言葉にすることが出来なかった。ついさっきみんなで思索し合ったように、白い封書に書かれた宛名と切手。それだけで、差出人を特定しろって言われても、どう考えたって無理がある。かといって、まさか蓉子さまの同意無しに、勝手に封を開けるわけにもいきまい。

しかし祥子さまは、そういう事を言っているのではないわ、と言って首を小さく振った。

「あの手紙、本当にお姉さまに渡して良い物なのかしら」

「えっ……」

祥子さまの言っている意味が良く分からない。

あれは紛れも無く蓉子さまに宛てられた手紙で、それを本人に届けることに何の躊躇いがあるというのだろうか。

キョトンとした祐巳の顔を見つめながら、祥子さまがポツリと話し出した。

「これは私の考えだけど。恐らく差出人は、自分が出した手紙であるということとを、蓉子さま以外の誰にも知られたく無かったんだわ。それは勿論、この手紙がお姉さまの手に届く前に、不特定の人間の手を経由するということとを分かっていたと、考えた上でね」

「確信犯……ですか」

「それで、敢えてリターンアドレスを書かないまま、この封書を投函したのではないかしら」

「でも、それなら何故、蓉子さまの自宅に、直接手紙を送らなかつたんでしょ……」

もし仮に、差出人が自分を送った手紙だということとを、祐巳達に知られたくないのであれば、わざわざリリアン経由で、手紙を送りつける必要なんて無いのだ。

「その行為にどういう意図があるのか、それは図り兼ねるわ。でも、恐らくこういうことでは無いかしら。多分、差出人はね、お姉さまの住所を知らなかったのよ。でも、お姉さまがリリアン高等部の生徒であると言っていることは知っていた。だから学園宛に手紙を送った。いいえ、送らなかつたのを得なかつたのではないかしら」

「……」

「これは私の杞憂かもしれないけれど、まさか……いいえ、お姉さまは決してそういう人ではないわね」

一旦言い掛けた言葉を呑み込むかのようにして、祥子さまはそこで口をつぐみ、また窓の外に目を遣ってしまった。

「良く分からない」

祐巳には祥子さまが何を言い掛けようとしたのか、全く想像も付かなかった。そううつしているうちに、バスはM駅の北口ロータリーへと到着していて、二人とも運転手に礼を言ってからバスを降りた。

それから改札へと向かう途中、二人の間に言葉は無かった。

「また終業式でね」

改札口で祐巳にそう声を掛けてから、祥子さまは一人自動改札を潜っていった。

「ごきげんよう……」

明日から、一週間近くも逢えなくなるのに、そんなにあっさりしなくなってる。

祐巳はまた一つ、今度は大きな溜め息を吐いた。

## タイクツとユウウツ

### 1

「おはようございます」

祐巳が、寝ぼけ眼を「シ」にすりながら台所へと降りてくると、一人でテーブルに座ってテレビを見ていたお母さんが、呆れた顔をして祐巳を見た。

「全く、試験休みに入ったと思ったら、すぐにお寝坊モードなんだから。もう十時よ」

「あ、本当だ……」

期末試験が終わって、すっかり気が抜けてしまっていたから気付かなかったけれど、台所に掛かっている時計の針は、もうすぐ十時を指さうとしていた。テレビでは朝のワイドショーが終わり、丁度一昔前の時代劇の再放送が始まるところだった。

「あれ、そういえば祐巳は？」

「何言ってるの、普段通りに起きて学校に行っちゃったわ」

「あ、花寺は休みじゃないんだっけ」

思い出してボンと手を打った。リリアンの高等部には、試験休みというありがたい制度が

存在するのであるが、花寺の場合は、期末試験が終わっても、次の日から普段通り登校という訳だ。もっとも、世間ではそういう学校が殆どなのだが。」

そつじい面でも、リリアンは確かに恵まれた学校なんだなあ」としみじみ思っ

「祐巳ちゃんも、休みだからってあんまりゴロゴロしないこと。今日だけは特別サービスでお寝坊を許可したけれど、明日からはきちんと、普段通り起きてもらいますからね。」

「えーっ」

祐巳が抗議の声をあげようとしたけれど、お母さんはそれだけ言っ

て椅子を立つと、台所に立って祐巳の朝食の準備を始めた。

「せつかく休みだから、思う存分朝寝できると思ったんだけどな……。」

第一、朝早起しただからといって、三文の徳になるようなことなんて何も無いのだ。

休み中に様子<sup>じょうす</sup>をまたどこかに遊びに行く訳でも無く、友達と予定を立てている訳でも無い。そつじい言えは、以前様子<sup>じょうす</sup>をまとどこかに遊びに行く訳でも無く、友達と予定を立てている訳でも無い。

試験勉強に追われてすっかり失念してしまっていたけれども、様子<sup>じょうす</sup>をまだって休みに入る前に一言声を掛けてくれれば良かったのに。

「(おれが)」

このまま、あの話は無かったことになってしまつたじゃないだろうか。

「(そ、そんな……)」

何せ多忙な様子<sup>じょうす</sup>さまのことだ。何ヶ月も前の約束なんて、すっかり忘れてしまっているかもしれない。だとすれば、この二学期の間、冬休みの遊園地<sup>ゆうえんち</sup>シートをずっと楽しみにしていた祐巳の立場って一体、

「何、朝っぱらから暗い顔してるのかじう、」の字は「

ショックの余り、頭の中でガンガンと効果音が鳴り響いていると、気が付けばお母さんが目の前に立っていた。

今日の朝食はブレーンオムレツにシラスとミニトマトを添えたもの。それにトーストと玉葱のたっぷり入ったコンソメスープといったものだ。

「早く食べちゃってね、お昼の準備もあるんだから。」

「はーっ」

そつじい残すと、お母さんは午前中のうちに洗濯物をするのでと言って、慌しく風呂回場の方に向かっていった。

台所に一人ボツンと取り残された祐巳は、もそもそとトーストにマーガリンを塗りながら、何とはなしに付きっ放しのテレビの時代劇に目を通る。王道といつかなんといつか、今更に悪代官と越後屋(といつ屋)だかどつだかは知らないけれど、が、料亭の暗い一室で悪たくみの最中で、お互いに口々にほくそ笑み合っていた。

「(由乃さん、休み中は何やってるのかな……)」

なんとなく、お下げ髪のちよつと気の強い親友のことを考えてしまふ。

試験休み中は、おそろしく今さまと一緒に買ひ物に出掛けたり映画を見に行ったり、二人水入らずの時間を過すんじゃないだろうか。

そりゃあ、他所の姉妹と祥子さまを比較するのは間違っているなんて、重々承知だけれども、それでも由乃さんと今さまみたいな、常にベッタリな関係というのも心の何処かでは羨ましい。

「(あーあ、つまらないな……)」

遅い朝食を摂り終えて、自分で使った食器を流し場で水洗いする。

もう真冬ということと、水道水はそのままでは手がヒリヒリする位冷たくて、お湯と水の蛇口を半分づつ捻りながら、洗剤をつけたスポンジで丁寧に洗う。瞬間ガス湯沸かし器なんて便利な機器が存在しない薔薇の館であれば、たったこれだけのことで一苦労なだけ。文明の発達って素晴らしい。

洗い物を終えてテーブルに戻ってくると、さつき悪巧みをしていた悪代官が、主人公と思しきイケメンのお侍さんに派手に斬られていた。時代劇ももうやらクライマックスらしい。

取り立てて急ぎの用事も無いので、テーブルに座ったまま、しばらくぼーっとする。付きっ放しのテレビではいつの間にか時代劇が終わって、今度はお昼の料理番組が始まっていた。時計に目を遣るともう十一時だ。

お昼まで、読みかけだった文庫本の続きでも読もうと思つて、自分の部屋に戻らうと椅子を

立った瞬間、廊下にある電話の呼び出し音が鳴った。

部屋に戻るといにて受話器を取らうと廊下へ出ると、すでにお母さんが電話に出ていた。

「ええ……あ、丁度ここにいますから、今替わりますわー」

祐巳の姿を目にする、お母さんは受話器を持っている反対側の手で手招きする。

「祐巳ちゃん、リリアンのお友達の高津さんからお電話よ。」

2

屋下がり。ここはM駅近くの喫茶店。

「由乃さん。さつきさ、時代劇見終わってから、私の家に電話掛けたでしょ。」

「うわっ、何故それを。」

祐巳の一言に、キョットとした表情をする由乃さん。うーむ、やはり。

約束の時間を少し過ぎて喫茶店に着いた祐巳が、開口一番カマを掛けると、先にテーブルに一人座って待っていた由乃さんは、とても分かりやすい反目を見せた。

「だって私も見てただよな、その時代劇。というか、たまたま朝御飯食べてるごときにテレビを付けていただけなんだから。」

「うーむ、まさか祐巳さんに行動パターンを読まれていたとはね」

複雑な表情をしながら一声唸って、それから溜め息をつく由乃さん。どうやら相当ショックだったらしい。

「そんなことより、私に話があるって、一体何？」

「まあまあ、まずは座りねい」

何故か罔つ引きみたいな口調の由乃さんに促されて、祐巳もコートとマフラーを脱いでから、由乃さんのテーブル向かいに腰を下ろす。と同時にウエイトレスがタイミンク良くお冷やを運んできた。

「カフェオレひとつ」

由乃さんはもう注文済みとのこと、真紅のチェック柄のクロス柄のクロスが掛けられたテーブルの上には、まだ手を付けていないプリンアラモードとミルクティーが鎮座ましましていた。この喫茶店のプリンアラモードは美味しいと、M駅辺りでは評判のお店で、甘いものに目が無い盛りりのリリアンの学生達にも、当然人気が高いのだ。

「それ、美味しそうだね。私も頼めば良かったな」

「いいわよ、私の分を分けてあげる。お昼食べたばかりで、どうせ一人じゃ量が少し多いくらいだし。その代わり、交換条件有りってことだ」

「何、それ」

祐巳が小さく首を傾げると、その瞬間由乃さんの目が一瞬キラリと光ったように見えた。

「まあ、これは祐巳さん呼び出した理由でもあるんだけどね」

「ふむ」

「例の手紙の件。結局何か進展あったの？」

「へい……」

『手紙』と言われて、一瞬間のことだか思い付かず、しばらくしてから、もしかして……と思いついた節に辿り着く。

「今さまに聞いたんだね……その話」

「うん、そつじつじつ」

なんと耳の早いことが。昨日、ミーティングの場に居なかった田乃さんは、昨晚令さまからミーティングの内容についての話を聞いている最中、例の祐巳が預かった簞子さま宛の手紙の話も小耳に挟んだのだそう。

で、今日祐巳を呼び出した理由と言つのも、詳しい事情を、当事者から直接聞き出したいが為、とこいつじつじつ。

「ほら、みんなが知ってる話をさ、私だけ知らないって言うのも、なんだか面白くないじゃない？ それに令ちゃんからの又聞きじゃ、入ってくる情報も断片的で、ちっとも要領を得ないんだもん。そこで、祐巳さんから直接詳しい話を聞きたいのよ」

要するに、由乃さんは自分一人だけ仲間外れになるのが、どうにも気に入らないらしい。

「そんなこと言っちゃって。私だって、シスターから手紙を預かって、そのまま薔薇の館でお姉さまに手渡してそれっきりなんだよ。手紙が今どうなってるかなんて、詳しくは……」

「いいの。私、祐巳さんに手紙の差出人は誰某（たれが）なんじゃないか、とか、どういう内容が書かれているんじゃないか、とか、そういう突っ込んだ話なんて、ちょっとも期待してないから。知っている範囲でいいから、この経緯を出来る限り詳しく教えてくれないかしら」

「……」

随分と失礼な物の聞き方じゃないかと、心の中で思ったけれども、由乃さんは目を輝かせ声を弾ませながら、さあ、さあ、と祐巳を急かし始めた。

「由乃さん、絶対に面白がるでしょ」

「だって、これは一種のミステリーだと思わない？」

「ミ、ミステリー……」

思わず素っ頓狂（とんきやう）な声をあげてしまった。

ミステリーと言うとあれだ、人が失踪したり殺されたりして事件が起こり、その原因と犯人を追及（つい）すべく探偵さん達が活躍する、小説とかドラマのこと。

でも今回の手紙の件、別に誰も居なくなったりなんかしてないし、誰かが具体的に何かの被害にあっちゃってわけでもない。

「まあ、これは私の勘だけど。なんだか危険な香りがプンプンする」

そう言い切ると、由乃さんはすっかり名探偵気取りで、ポーチの中からノートとペンを取り出して、如何にもこれから事件を調査しますって感じで、話のメモを取る準備を始めた。

「さあ、ワトソン……もとい祐巳さん、詳しい話を聞かせて頂戴」

「じゃあがないな」

完全に由乃さんのペースにはまっちゃってしまった。こうなっちゃったら、一寸やそっとのことではこの場から逃げられそうに無い。

観念した祐巳は、取りあえず、昨日の出来事を頭の中で思い出しながら、この経緯とみんなの見解を由乃さんに逐一話していった。そうこうしているうちに、頼んでいたカフェオレもテーブルの上に運ばれてくる。

「それじゃあ、祥子さまは確かに言ったのね」

「うん、その手紙、本当に祥子さまに渡してしまっただいのかな、って」

祥子さまが、昨日バスの中で呟いた言葉を祐巳が口にすると、由乃さんは「ふーむ」と唸（う）ってから、腕を組んだまま何かを考え込み始めてしまった。しかしながら、由乃さんが祥子さまのその言葉の何処に引っ掛かりを覚えたのか、祐巳には全くもって見当が付かない。

「由乃さん、約束通りプリンマラモード、ちょっと分けてね」

「ごひんじり由田」

由乃さんはどうやら推理に夢中らしく、目の前のプリンマラモードを片手で無造作に祐巳の方にずいと差し出した。

「ありがとっ、わ、美味しそう」

由乃さんには申し訳ないけれども、育ち盛りの女子高生の祐巳にとっては、どっちかというミステリーより甘いものの方に興味津々だから。

お手製のプリンの上になっぶりと生クリームとシロップ漬けのチェリーを乗せ、その周りにミントアイスや様々な果物をたっぷり添えて、その上から粉砂糖と溶かしたチョコを掛けている。見た目だけでも食欲をそそる一品だ。遠慮無くお裾分けさせて貰うことにした。

「いただきますー」

「祐巳さん!!」

スプーンでプリンを一口運ぼうとした瞬間、由乃さんが突然テーブルを両手でバンと叩きながら名前を叫んだので、祐巳は吃驚して思わずプリンをスカートの上に落としてしまった。

「あーっ!」

「……何やってるの。そんなことよりね、聞いて」

驚かせたのは、他の誰でも無いあなたでしようが。

折角、今年の秋に買ってもらったばかりのキュロットスカートだったのに、早くも染みを付けてしまった。取り合えず、側にあっただおしほりで手早く汚れは取ったつもりだけど、帰った

ら本格的にシミ抜きしなくちゃ。

しかし、そんなことにはお構い無しに、由乃さんは少し興奮した口調で喋り始める。

「あのね、色々と考えてみたんだけど。どう考えても、その手紙は怪しい。大体、差出人も書かずに送りつけてくる手紙なんて、きつとロクなものじゃないわよ。もう祥子さまは蓉子さまに手紙を渡してしまったの?」

「え……」

昨日学校帰りに駅で別れてから、祥子さまとは連絡を取ってない。第一、昨日の今日の話だ。

「その手紙、やっぱり差出人不明で突き返した方がいいと思う。大体、中に何が入っているか分かったもんじゃないわ」

「何か、って」

封筒の中に入れるものと言えば、手紙以外に何かあるって言うんだらう。

祐巳が昨日シスターから封筒を受け取った時、中に紙以外の何か特別なものが入っていたような感じは無かった。もちろん由乃さんの言っている「何か」って、例えばどこかのデパートの商品券とか、巨人戦のチケットとか、そういう気の利いた類の物じゃないんだらうけど。

「例えば、嫌がらせの手紙。身に覚えの無い悪口やらその人の身体的な欠陥やら、とにかくありとあらゆる誹謗中傷(ひぼうちゆうきやう)を書いて送りつけたりするの。尤も(もつと)、そんなものならまだ全然可愛い方だけ」

「可愛い、かなあ……」  
 身に覚えのない自分の悪口なんかを、延々と書き連ねた手紙を買って、心中穏やかな人なんて居ないと思っけど。

しかし、続けて由乃さんは眉をうんと蹙めながら、祐巳にコソコソと耳打ちした。  
 「例えばカミノリとか、毒物とか。もしかしたら爆発物……なんてことも」  
 「はあっ?」

おいおい、幾らなんでもそれは一寸想像を広げすぎなんじゃないか。

カミノリはともかく、毒物だ爆発物だなんて、そんな物騒なものがあのペラッペラの封筒に入ってるわけが無い。ヤクザやマフィアの抗争じゃないんだから。

祐巳が呆れた顔をする。由乃さんはそれでも真剣な顔をして言葉を続けた。

「もちろん、今例に出したのはちよっと大袈裟かもしれないわよ。でもね、実際にその手の犯罪って過去にあつたりするのよ。だから、ただの封書だからって、差出人不明の手紙を受け取った人間が、軽はずみに封を開いたりなんかすると。こう、ドカーン……ってね」

「ひゅ……!!」

演出なのかなんなのか、由乃さんが両手をバツと広げて、効果音まで付け加えてくれるものだから、祐巳は思わず情けない声をあげて仰け反ってしまった。

「あはは……多分考え過ぎだよ。それに蓉子さまは、人に恨みを買うつような人じゃないし」

元紅薔薇さまである水野蓉子さまは、清く、正しく、凛々しく、誰にでも公平でお優しい方なのだ。そりゃあ、何かを追求する時の蓉子さまは確かに容赦ないけれど、それだけで人に深い恨みを買うつようなことがあるなんて、とてもじゃないけれど祐巳には信じられなかった。

「うん、蓉子さまがそんな人じゃないってことに關しては、私も祐巳さんと同意見。私だって、蓉子さまのことを信じてるわよ。でもね」

「ひゅ……」  
 「世の中にはね、明らかに自分に否があることさえ、人から指摘されたり追及されたりするく、それを逆恨みして、相手を陥れようとする悪い人間だって、幾らでもいるのよ」

「……」  
 「蓉子さま、お強いから。有り得る話だと思わない?」

確かに蓉子さまは強い。そりゃあもう祐巳なんてあるかあの様子さままでさえ、手の平の上で弄んでしまわれるようなお方だ。ちよっとやそっとの相手では歯牙にも掛からないだろ?。

だからこそ。もし仮に蓉子さまのそついう強さに、面子を傷つけられたと感じた人が仮に居たとすれば、その報復の仕方だって真正面からでは無い、というのもしごく自然な考え方も無い。

「話を聞けば、手紙の筆跡は女の人のものだって言うじゃない。ちよっぱり可能性は高いわ。あのね、女性の敵は、ちよっぱり女性ののち」

由乃さんは随分きっぱりと言いつた。

女の敵は女。それって結構核心突いてるかもれない。

「うーん……」

なんだか話を聞いているうちに、由乃さんの説にも、一理あるような気がしてくる。上手く丸めこまれてるだけのような気もするけれど。

「で、結局どうするの？」

「その手紙、私は受け取り拒否で、郵便局に突き返しちゃう方がいいんじゃないかって思うわけ。祥子さまが手紙を渡して良いのか悩んでいたって事は、やっぱり祥子さまも不安だったに違いないのよ」

由乃さんはまるでエルキュール・ポワロみたいに、両手の指をあごの下で組んだ状態で、じつと祐巳の目を見た。

「手紙のことで、祥子さまの目に触れる前に、無かったことにしちゃおうってわけ」

「うん、そういって。なんかか祥子さまの手に手紙が渡るのを、未然に阻止できないかなと思つて。祥子さまに、この話が伝わっちゃう前にね」

お強い祥子さまのことだ、自分宛の手紙が来たって連絡を受ければ、それはもう祐巳達が何を忠告しようが、きつと受け取つてしまわれるだろうから、って由乃さん。

「で、私にどういって言うの？、もう、手紙は祥子さまの手に渡っちゃつてるのよ」

「それでね、祐巳さん。祥子さまに今までの話、要約して伝えてくれないかな」

「は、はい……」

ちよつと待った。そんな荷の重い役目なんて祐巳には無理。慌ててフンフンとかぶりを振ると、由乃さんは眉毛を吊り上げながら、ピシッと右手の人差し指を祐巳の鼻先に突きつけた。

「ちよつと、これは祥子さまの大ピンチなのよ。もしも事があつたりしたらどうするわけ？」「は祐巳さんの肩に全てが掛かっているんだから」

おいおい、さっきから一方的に不安を煽つておいて、今度は全ての重荷を祐巳に押し付けよつて腹積もりですか。

「それならば、由乃さんが祥子さまに直接話せばいいじゃない。今、私に話したように、その方が何かと面倒が無くていいよ」

ただでさえ口下手の祐巳が、理詰めです祥子さまを説得できるわけがない。そういう役割なら由乃さんの方がよっぽど適任だと思つし。

「馬鹿ね、祐巳さん。私は黄薔薇ファミリー、祐巳さんは紅薔薇ファミリー。今回の件は紅薔薇ファミリーの身内に起こつた事件なのよ。基本的に、薔薇ファミリー内でのトラブルは、身内で解決してもらわなくっちゃ。私はこつして、祐巳さんに直接アドバイスをしてあげる位が精一杯のおせっかいなのよ」

「……」

最早何をかいわんや、である。要するに、由乃さんは状況をかき混ぜるだけかき混ぜておいて、あとは祐巳に全て丸投げして満足、らしい。とんでもない迷探偵である。

「とにかくそういうことだから、ね。うん、すっきりした。あ、祐巳さん、もうプリンマラモードいらなの？ 目一杯使ったら、なんだかお腹空いちゃってね」

あっ、と祐巳が言葉を発する前に、由乃さんは目の前にあったプリンマラモードを攫<sup>さら</sup>っていった。まだ一口も口にしていなかったのに。

儼然<sup>びぜん</sup>とした表情で由乃さんをねめつけると、余裕たっぶりの表情の迷探偵さまは、右手に持っていたスプーンを、チツチツと左右に揺らしながら言った。

「祐巳さん、私の心遣い、分らないかなあ。どつせこの試験休み中、様子さまと逢える機会が無くて悶々<sup>もんもん</sup>としてたんでしよう？ 折角、機会を作ってあげてるんだから、ね」

「……」

そんな痛いところだけは、スバリ核心を突いてくるんだなあ、と、祐巳は呆れた。

それは私達姉妹<sup>スール</sup>の問題、余計なお世話です。

そう言い返せなかった自分と、目の前でクリームたっぶりのプリンを頬張る由乃さんが本当に腹立たしく感じられて。

一つ大きな溜め息を付いてから、すっかり冷めてしまったカフェオレを一口、口にした。

## 3

「話は分かったけど、で、なんで俺にそんなこと聞くわけ？」

ついさっき、風呂から上がってきたばかりの祐麒が、バスタオルを首に掛けたまま訝しげな表情を浮かべながら、そう答えを返した。

「ん、なんとなく……かな」

「なんとなく、って言われてもね。そんな訳の分からない話、いきなり相談に乗ってくれて言われて、ボンと答えなんて、出てくるわけ無いだろ」

「別に、単純明快な答えを期待してるわけじゃないんだけどさ。由乃さんの話聞いてたら、どうしたらいいのが、良く分かんなくなっちゃったんだよね」

上でお揃いのピンクのトレーナー姿であべらをかいたまま、ソファの上でゴロンと横になつて、祐巳はリビングの天井を見上げた。

昼間、由乃さんと喫茶店で会って話をしてから、家に帰って一人で色々と考えてはみたのだけれども。

結局どうしたらいいのか、ほんの二・三時間で考えがまとまる訳も無く、そのうち夕方になって学校から祐麒が帰ってきたので、思い切って、祐巳は今までの話を打ち明けてみた。

「まあ、話を聞く限り、確かに由乃さんの説にも頷<sup>うなづ</sup>ける部分もあるけど。でも、結局は憶測の

域を出ない話なんじゃないの？」

「うん、だから迷ってる」

なにしろ、何一つ「わ」といった確証が持てない事ばかりなのだ。

由乃さんは、響子さまの耳に入る前に、手紙のことを無かったことにしちゃった方がいいって力説していたけど。でも、それって冷静に考えれば、響子さまにとって余計なお節介だったりするんじゃないだろうか。

もしも、何らかの事情があつて、リターンアドレスが書けなかっただけで、本当は響子さまにとつて凄く大事な手紙だったりしたら、その時はどうするんだらうって。

だからといって、手紙の出所が怪しいといつのも、実際問題否定できないわけで、じゃあ一体どうしたらいいんだらうって、一人で考えれば考えるほど、頭がこんがらがって訳が分からなくなってしまうた。

それで、薫にもすがる思いで……とまでは言わないけれど、男の子の祐麒だったら、祐巳達とはまた別の見方が出来るんじゃないかとも思ったんだけど。

しかし祐麒曰く、やっぱり訳の分からないものは訳が分からないらしい。

「あー、どうしたらいいのかな……」

祐巳が一人で思索している間にも、祐麒は台所で冷蔵庫の中を漁りながら、やがて見つけたらしい牛乳瓶を取り出して、右手を腰に当てながらググーッと飲み干した。絵に描いたよう

なボーイだ。

「とにかく、俺や祐巳がこうやって無い知恵絞って考えるより、祥子さんに電話して相談した方がいいんじゃないの？」

「ま、そうなんだけども」

横にしていた身体を起き上がり小法師こぼしみたいに起こして、はぁーっ、って深い溜め息を付く。

「何、なんか祥子さまに電話できない理由でもあるわけ？」

「別に」

そんなわけじゃない。でも、自分の頭の中で話を整理できていない内に、祥子さまに電話したところで、何の意味も無いはずなのだ。

それに、そもそもこの試験休み中、祥子さまが家に居るって保証だって無いし。

去年だって、祥子さまはお父さまの付き添いだとかで、試験休み中、まるまるフランスに滞在していたのだ。

休み中の過ごし方、祐巳に一言も相談が無かったのだから、もしかしたら今年も同じように、何処か海外で過ごしているからかもしれないし。

「本当は電話したくてたまらないけれど、顔に書いてるよ、折角の試験休みにお姉さまと会えなくて寂しいです、つまらないです、構って欲しいですって」

「祐麒……」

ズバリ核心を突かれたので、瞬間的にカーッとなって、近くにあったクッションを祐麒に投げつけた。

「うわ、こわっ」

クッションを軽く片手で受け止める。こっちにボンと投げ返して、女のヒステリーは怖い怖いって冷やかしを入れながら、祐麒は早々にリビングから逃げ出してしまった。

「……」

追いかける気力も無くて、またソファにコロんと横になる。

由乃さんはおるか、祐麒にすら簡単に心を見抜かれてしまう位だから、今日の祐日は、よっぽどまらないって顔してたんだろっか。

でも、つまらないのは事実なのだ。

「うして手紙の話をしている間だって、祥子さまはどっつ風を考えているんだろっか、試験休み中の今頃何してるのかなとか、今日の晩御飯はなんだったのかなとか……まあとにかく、本当なら嬉しい筈の一週間の休みだって言うのに、そんな感じでしたっとも気分が弾まない。

「大体、これが祥子さまと一緒に過ごせる、最後の冬なのに……」

祥子さまったらさこのところ、本当に分かってるんだろっか。

残り少ない、姉妹での学園生活、だから、この冬は一杯祥子さまに甘えたかったのに。

「祐日、あれ」

一人でフツツと愚痴っている、入り口から祐麒が顔だけ出してこっちに声を掛けた。

「何？」

「まあそんなに怖い顔すんなよ。なあ、とにかく祥子さんに電話掛けてみれば？」

「祥子』さん』じゃなくて、祥子』ちゃん」

「あーはいはい、祥子さま。でさ、相談する前から、あんまり難しいこと考えたってしょうがないんじゃない？ それに、多分祥子さま……さあ、祐日が電話してきたっただけで、多分喜んでくれるんじゃないかと思うよ。」

「……」

「いいか。お前の取り柄は、そっやって頭使うことじゃないんだから。考える前に行動あるのみ、言いたいことはそんだけだよ、じゃな」

早口で言い終わると、こっちがぼかんと口をあげている間に、祐麒はまたさっさと自分の部屋に戻って行ってしまった。

「祐麒のやつ」

相変わらず何処か不器用な言い方だったけど、あれでも精一杯気を使ってくれたんだろっかって。その心遣いが身に沁みだ。

「(キーン……)」

こっちになったら行動あるのみ。夕食が終わったら、祥子さまに電話を掛けてみよう。

両手でパンと頬を軽く叩いてから、祐巳はもう一度クロンとソファに横になった。

## 4

『それで、こんな時間に電話を掛けてきたのね』

受話器の向こうで、祥子さまが苦笑いしながらおっしゃった。

「すっ、すみませぬ……」

相手が目の前に居るわけでも無いのに、反射的に「ムム」と頭を下げてしまった。部屋にあるフクロウを象った目覚まし時計の針は、既に十一時を少し過ぎたところを指している。

電話を掛けようとした決心したまでは良かったのだけれども、あれからお風呂に入って、「ご飯を食べて、その後自分の部屋に戻ってから、ちよっとだけ横になる」とベッドに転がってしまっただのがいけなかった。

二、三時間ほど熟睡した後、目が覚めてみればもう十一時近く。かと言って、今日中に電話を掛けなければ、折角の決心が鈍ってしまうような気がしたから。

駄目でもともこのつもりで、祥子さまのお宅に電話をしたら、運良く祥子さま本人が電話に出たというわけだ。

『電話を取ったら、いきなり、祐巳が思いつめたような声で出るんですもの。何があったかと思っ、一瞬にヤリとしたわね』

自覚は無かったんだけど、どうやら相当テンパっちゃってたりしい。

『で、由乃ちゃんはこの手紙、お姉さまの手には渡さない方がいいって言うのね』

「ええ、まあ」

尋間に由乃さんと二人で話したことを、覚えている限り、祥子さまに掻い摘んで説明した。

起き抜けてまだ頭が上手く回っていないので、きちんと説明できたどうかは、いささか怪しかったけれども、それでも祥子さまは「ご迷惑の言いたくないで、一応理解してくれているみたいだった。

「で、お姉さまはどうされるおつもりですか。私は……正直良く分からないです」

尋間の話を祥子さまに伝えた時点で、ある意味、祐巳のお役目は終わったようなものだった。でもやっぱり、祥子さまがこれでどう対応を取るのか、それは興味がある。

『せし無理だわ』

「へっ」

祐巳の言葉を受けた祥子さまの唐突な一言で、思わず間の抜けた声を出してしまった。無理？ 一体、何が無理だっ、て言うんだらう。

「あ、お姉さま……」

『祐巳が電話をくれるちょっと前にね、お姉さまに、その手紙の件で電話したばかりなの。したらお姉さまが、丁度、自分も来週で今年の授業が終わるから、手紙は試験休みが開けてからでも持ってきて頂戴って。そいつい約束をしてみましたの』

「……そうでしたか」

「べつやう一足遅かった、らしい。」

「いささきと言つことは、祐巳が居眠りしている間に、祥子さまは蓉子さまのお宅に電話を掛けていたということになる。」

「またもや大ドシ。由乃さんにこのことを話したら、両目吊り上げて説教されそつた。」

『でもね、由乃ちゃんが心配するの分かるのよ。私もお姉さまにきちんとお話ししたわ、差出人不明の手紙だつてこと。もしや悪意があるかどうか、なんてことまでは口に出して説明しなかつたけれども』

「それで、蓉子さまは」

『それでも構わないから、持っていらいしゃいって。私も久しぶりに祥子の顔を見たかつたら、丁度いいって』

「お姉さまにも随分と無沙汰してしまつたからって、祥子さまは苦笑していた。」

「全然会っていらいしゃらなかつたんですか」

『ええ、この間の学園祭の時以来ね。二人でゆっくりとお話する機会なんて、ここ暫く本当

に無かつたわ』

その学園祭の前は、祥子さまのお祖母さまのお葬式の時だつて言つから、本当にお久しぶりしちゃうつてもうじい。

「お姉さまも大学に入つてからは、いつもお忙しそうだし。私も、紅薔薇さまの立場を継いでからは、山百合会の方に構つてはつきりだつたから。しょうがないわね』

「はあ」

「祥子さまは、本当にそれで平気なのかなつて思った。」

心の何処かで、会いたいのを我慢しているんだろうか。それとも、たとえ姉妹の契りを結んだ仲といえども、お姉さまが卒業してしまつたら、お互い離れ離れになつてしまつても、そんなものだつて割り切れるようになつちゃうんだらうか。

「祐巳、どつしたの。電話繋がつてる？」

「えっ……あ、はい。大丈夫です。」

『嫌だわ、まだ寝惚けているんじゃないかと思つたわ』

「そつ言つて、祥子さまは受話器の向「つで笑つた。」

『どつしたせよ、これ以上私達があれやこれやと心配しても、仕様がなないのかもしれないわね。こちらから話を通つてしまつた以上、後はお姉さまが判断なさいとだけと思つたわ』

「そつ……どつね」

結局、そういうことなのだ。

「こちであれこれと頭を巡らせるまでも無く、警子さまだったらきつと適切な判断を下すことが出来るんだらうって、祥子さまのおっしゃる通り、これ以上、祐田達があれやこれやと心配したところで、もはやそれは、野次馬根性の延長になってしまっただって。」

『そういうことから、手紙の件、貴方は心配しなくていいのよ。由乃ちゃんにも、そう宜しく伝えておいて頂戴』

「は……」

余りにあっさりとした話が片付いてしまって、なんだか拍子抜けしてしまった。

「あの、お姉さま」

『なあに』

「このまま受話器を置いてしまつのは、なんだか忍びなくて。思い切って話を切り出してみた。

「お姉さまは、この休み中どのつなさるんですか。何かご予約が詰まっているとか」

もし、お姉さまの予定が空いているようだったら、一日くらいテートのお誘いでも出来たらいいなって。遊園地テートの話だって、夏以降ずっと柵に上がりっぱなしだったし。

『予定？ ああ、そういえば祐田が電話をくれたのが今日で良かったわ。実は明日からね、お父さまの付き添いで、また海外に行く事になったのよ』

「……」

『去年の試験休みはフランスだったけれど、今年はニュージーランドなの。向こうは日本とは氣候が逆だから、帰ってきてから、体調を崩さないといいけど』

「……そうですか」

「なんだか目の前が真っ暗になってしまって、もうこのまま受話器を置いてしまいたい気分だった。悪い予感ほど良く当たるといっつのは、本当なのかもしれない。」

『祐田、また黙り込んで……どうしたの』

「いえ、なんでもありません」

祥子さまにへこんでいる姿を察されまいと思つて、努めて明るい声を返そうと思つたけれども、どうも上手く演技できなかつたらしくて、こぼれの声を聞いた祥子さまも、受話器の向こうで黙りこくってしまった。

「あの、お姉さま。夜分遅くにつまらない事で電話してしまって済みませんでした。警子さまに宜しくお伝え下さい」

それじゃおやすみなさい、って受話器から耳を離そうとした瞬間、祥子さまの「お待ちなさい」として、凜とした良く通る声が聞こえた。

「は、はい……なんでしょ、」

『貴方もいらつしやう』

「……」

いらっしゃいって、一体何処に。

まさか、これから一緒にニュージールランドにですかって、思わず問い返したら、どうもそれがツボに嵌<sup>は</sup>まってしまったらしい様子さまは、電話の向こうで大笑いしながら、祐巳の勘違いを訂正してくれた。

『試験休み明け、整子さまのお宅に一緒によ。貴方も偶には、私に付き合っておばあちゃん孝行なさい』